

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第七主日(7/31)礼拝

「主の弟子として生きる」

使徒言行録第6章1節から7節

【聖書】

使徒言行録6:1 そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。2 そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。3 それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と“知恵”に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。4 わたしたちは、祈りとみ言葉の奉仕に専念することにします。」5 一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、6 使徒達の前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。

7 こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。

1 弟子たちの教会

使徒言行録では、主イエス・キリストを信じ従う人々を、様々な名前で呼んでいます。今日の聖書にも新しい呼び方が出てきます。「弟子」という呼び方です。1節「そのころ、弟子の数が増えてきて」2節にも「弟子をすべて呼び集めて」、最後の7節には「弟子の数はエルサレムで非常に増えていき」と、短い7節の段落で三回も「弟子」という言葉が出てきます。「弟子」と聞くと、私たちは、先ず主イエスの直接のお弟子さん達、十二人の使徒たちに代表される人々を思い起します。しかし、弟子というのは、師匠に従う、師匠に学ぶ人達のこと。だから、主イエス・キリストに従って行こう、という信仰が与えられた私達も皆、主の弟子です。私たちは自分達が主の弟子であることをどれだけ真剣に受け止めているのでしょうか。ある牧師は、次のように説教しました。「ために教会員数を『弟子の数』と言いかえてみるとよい。教会総会で『私たちの教会の教会員数は〇〇人です』と報告するのではなくて、『私たちの教会には、〇〇人の主の弟子がいます』と言ってみるとよい。自分は、主イエス・キリストの言葉を守り、主イエス・キリストの生き方をまねる弟子として本当に生きているか？自分達のことを『主イエスの弟子』と呼んだ途端に、姿勢を糺す思いが生まれるのではないか。」確かにその通りだと思います。

2 エルサレム教会の問題

しかし、そんな主イエスの弟子たちが集まる教会として、あってはならない事が起こった、と

今日の聖書は語ります。急拡大するエルサレムの弟子たちの群れには、二つのグループができたようです。ひとつは、パレスティナで生まれ育ち、1節にはヘブライ語とありますが、主にアラム語を話していたヘブライ人のグループ。一方で、ユダヤ人は紀元前から世界中に散らばって暮らしていたのですが、そのようなパレスティナ以外の離散の地で生まれ育ち、今はエルサレムに戻ってきていて、ギリシア語を日常語として暮らしていた人々のグループ、彼らは「ヘレニスト」と呼ばれていたようです。ヘブライ人もヘレニストも共に一人の神を信じるユダヤ人でしたが、ヘブライ人とヘレニスト達は随分と違いました。現代で言えば、アメリカやブラジルに移民した日本人の子孫、所謂、日系人と、日本国内ですっと暮らしてきた人々とは、考え方も習慣も随分と違っているのを見ればわかるでしょう。

そのヘレニストグループから、「日々の分配」のことで苦情が出た、とルカは教会の問題を切り出します。当時のエルサレム教会では、暮らし向きに余裕がある信徒達が財産を持ちより、貧しい人々と分かち合っていたようです。ところが、少数派のヘレニストの寡たちが、日々の食事の分配において、他の人々と比べて不利に扱われていた、というのです。経済的基盤をすべて夫に依存していた古代世界では、夫を亡くした妻、寡は、頼る者もない、最も弱く小さい存在でした。教会の中でもおそらく少数派であつたらうヘレニストグループの中でも、更に最も弱い寡を蔑ろにするとは。主イエスの弟子にあるまじき振る舞い、教会ではあつてはならないこと。

しかし、それが起こるのが、人間の集まりです。現代でも、教会でこのような問題は起こらない、とは言い切れない事を皆さんもよくご存じでしょう。主イエス・キリストの弟子の群れ、と言っても教会は人間の集まりです。食事の分配の仕方でも差別が起こるし、派閥ができて、仲間割れも起こります。このような問題等起こらない教会がいいのは言うまでもありません。が、しかし、教会が天国に立っているのではなく、この世に立っている限り、それは不可能です。教会にも「神を知らぬこの世」が入り込みます。問題のない教会はない、のです。

だからこそ、教会の中で発生した問題にどのように対処するか、が重要となってきます。十二人の使徒たちは、主イエスの弟子として、どのように問題に対応しようとしたのでしょうか。そこに、キリストの弟子としての在り方が書き出されています。

3 他者を必要とする教会

使徒たちには、ヘレニストとヘブライ人を完全に分離して、二つの教会にしてしまう、という選択肢もあつた筈です。考え方や習慣が異なる人々が一緒にいるのはトラブルのもと、この世の考え方では、別々の教会に分けてしまうのが、手っ取り早い解決策です。しかし、使徒たちはその道を選びませんでした。「弟子たちをすべて呼び集めた。」とルカは記します。現代風に言えば、臨時教会総会を急遽開催したのです。そして、次のように提案しました。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と“知恵”に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。

彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りとみ言葉の奉仕に専念することにします。」

私は、教会の牧師という務めを通じて多くのことを学ばせてもらっていますが、その一つに、「教会には“異なる者”の存在が必要だ」という事があります。確かに、自分と同じような境遇で同じような教育を受け、同じような考え方、同じような聖書理解の人々が集まった方が楽です。ですが、それでは教会は豊かにはなりません。自分達の狭い考え方に縮こまり、貧しくなるばかり。

何故なら、共にいる事が時には葛藤になるような、自分とは異なる人々の存在を通して、私たちは、主イエス・キリストを知るからです。自分と同じような人々ばかりでは、キリストを知る事が少ない、と私は思います。考えてみましょう。父なる御神は、全知全能のお方、他者など必要ない唯一のお方です。しかし、父なる御神は、被造物である人間を愛し、その独り子さえもお与えくださいました。主イエス・キリストも子なる神、神の独り子であるにも拘わらず、父なる神のみ旨に従い、十字架の死に至るまで、ご自身と異なる罪びとの私たちを愛し抜いてくださいました。

かつて、「隣人を自分のように愛しなさい」と教える主イエスに対し「誰が私の隣人でしょうか」とうそぶいた律法学者がいました。主は、彼に対して、有名な、「憐み深いサマリア人の譬え」を語り、最後に問いかけます。「誰が強盗にあった男の隣人となったか」。律法学者が「サマリア人です」と答えると、主は仰います。「行ってあなたも同じようにしなさい」

「誰が自分の隣人か」「誰を愛すべきで誰を愛すべきでないか」と考えてしまう私たちに対して、主イエスは、「自分の隣人にはしたくないような人をも、あなたの隣人としなさい」と招かれるのです。

しかし、私たちは、主イエス・キリストと違い、自分達と異なる人々を愛することが難しい者達です。そこで、私たちは葛藤し、神を仰いで助けを求めるしかありません。愛せない、という所で呻き、自分の小ささ、弱さ、愚かさ、狭さを知る、そして、そこに聖霊なる御神が働き、主イエス・キリストのことを思い起させてくださいます。そうして、初めて私達は、「ああ、この人も主イエス・キリストが十字架で死んで救ってくださった方だ、主が命を投げ出す程に愛された方だ」と相手を見ることができます。主イエス・キリストの十字架と復活を通して隣人と出会うことを学ぶのです。主イエスの故に、自分とは異なる他者を愛する、大切に思う。主イエスを通して自分とは異なる人々の隣人となる。それが主イエスの弟子の在り方であるし、主を求めつつ、仲間を愛することを学ぶ場所が教会だ、と聖書は私達に語りかけます。何故なら、私達が主の弟子とされたのは、主イエス・キリストの証人となる為だから。主イエス・キリストを知らなければ主の証人とはなれないし、自分で愛せる人を愛しているだけでは、主イエスのことをより知ることはできないからです。

そして、主イエス・キリストの弟子には、師匠からの独立はありません。もう主を必要としない程に完璧に正しい人間、完成された人間になる事などない、使徒たちでもそうです。どこまでも主イエス・キリストの恵みと父なる神の愛、そして聖霊の御力を必要とする、罪赦された罪びとたち、それが主イエス・キリストの弟子たちです。

私達がキリストの弟子を卒業する事はありません。ずっと主の弟子です。主は生涯面倒をみてくださいます。

4 みんな部分

さて、注意したい事があります。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。」と使徒達が語ったからと言って、彼らは、弱くされた人々の生活の世話をする、という教会の愛の業を軽視しているではありません。もし、使徒たちが最も小さくされた人々の世話を軽く考えていたとしたら、苦情を取り上げる事も、その為に臨時教会総会を開く事もしなかったでしょう。世話する務めを委ねる人々について、「霊と知恵に満ちた評判のよい人を七人選びなさい」と言う条件を付けることはなかったでしょう。

そうではなくて、使徒たちは、自分達が限界ある人間である事を認め受け入れ、自分達に先ず第一に求められる務めは何かを祈り考えたのです。そうして、神が喜ばれる自分達の務めは、先ず何よりも「祈りとみ言葉の奉仕」だ、と判断したのです。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。」の「好ましくない」の部分は、直訳すれば、「神が喜ばれることではない」です。使徒たちは、神の言葉を取り次ぎ宣教する事を第一としました。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」の申命記の聖句にもあります。使徒たちがパンの世話を優先し、神の言葉の奉仕をしなくなったら、誰が神の言葉を取り次ぐのでしょうか。そうなれば、教会に集められた弟子たちは何によって生きればよいのでしょうか。それは現代の教会の牧師達の務めにも言えることです。

誰もが限界のある一人の人間であること、誰も全体にはなり得ない、という事を深く弁える事は、主イエスの弟子として、とても重要な事だと思います。教会は主イエス・キリストの体であり、どんなに優れた人間でも、部分でしかない、全体にはなり得ません。使徒たちであっても事情は同じでした。十二人はその事をきちんと弁えていたのです。人にはそれぞれ、神から与えられた異なった賜物、多様な賜物を用いて、主イエス・キリストの証人としての働きをする為です。そうして、教会、イエス・キリストの体を造り上げるのです。それが弟子たちの教会の姿です。パウロは言いました。「たしたち一人一人には、キリストの賜物のほかりに従って、恵みが与えられています。(略)この降りて来られた方(キリスト・イエス)が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも更に高く昇られたのです。そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。」(エフェソ4:6~7、10~13)

5 召命

さて、使徒たちは、天の御神に、弟子たちが選んだ七名を承認して頂くように祈り願い、彼らの上に手を置いて、自分達の力と権威を継承させます。しかし、神が選んだのはこの七名だけではありません。主イエスの弟子として教会に集められた者達は皆、神によって、主イエス・キリストによって選ばれた一人一人です。今日の礼拝の招きの言葉、「あなたがたが私を選んだのではない、私があなた方を選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、私があなた方を任命したのである」とある通りです。主イエス・キリストの弟子として生きる私達は、主イエス・キリストに任命された一人一人です。今、礼拝をささげている皆さんは、主イエス・キリストから名前を呼ばれ、呼び出され、引っ張りだされた者達、弟子として任命され召命を受けた召命者。使徒たちやエルサレム教会の弟子たちと同じです。

召命者と言えば、有名なローマ書第八章28節のパウロの言葉が思い浮かびます。「神を愛する者達、つまり、ご計画によって召された者達には、万事が益となって共に働くどうことを、私たちは知っています。」ここでパウロは、何気なく、とても重要なことを言っています。神によって召し出された者とは、「神を愛する者達」である、というのです。神は、独り子イエス・キリストを私たちにお与えになるほどに愛してくださった、主イエス・キリストの十字架と復活により現わされた神の愛を経験し、自分への愛だと言う確信が与えられ、これに応えて神を愛そうとする者達、それこそ、神がご計画に沿って召し出してくださった召命者達。

私たちが神を愛すると言っても、主イエス・キリストが私たちを愛してくださる愛と比べれば、その深さ、大きさ、広さ、高さ、どれをとってもくらべものにはならない、私たちの神への愛は小さい小さいもの、砂粒一粒ほどにもならぬものです。ですが、神は、そのような私たちの乏しい愛をも大いに喜んでくださり、これ以上ないほどに豊に豊かに用いてくださるのです。

ですから、主イエス・キリストを通して父なる神を愛する者を、主イエスの弟子と言い換えてもよい、と私は思います。実際、弟子とは師匠から学ぶ者です。そして、「学ぶ」という意味のある英語のStudyという言葉の語源は、「愛する」という意味ある言葉だそうです。選ばれた私達に何か選ばれるべきよい所があったからではありません、神の一方的な選びは理由が分からない選びです。この選びを受け入れ、主イエス・キリストの愛を受け入れ、主を愛し、主イエスの行いや行動を学ぶ。それが主の弟子となることです。そうして弟子とされた人々は、集められて、お互いに大切に思い合いつつ、主イエス・キリストの体である教会を建て上げていく、そうして、主イエス・キリストをより深く知り、弟子たち皆で、イエス・キリストを証していくのです。

虚しいものを追い求めて生きていました、自分と異なる他者を愛せないのに、「人間だから仕方がない、あいつは私の隣人ではない」とうそぶいていました。そんな神の選びに耐えるような者ではない小さい者達を選び、その名を呼んで、御前に召し出してくださり、神を愛し、主イエス・キリストを愛する者、主イエスの弟子として変えてくださる、教会という他者との交わりの中で、弟子として、主イエスの証人として成長させてくださる、一生涯に渡って。主イエス・キリストの弟子とは、何という幸いな命でしょうか。父なる神に感謝します。